

花もまた塵ちり

毎朝、息子の車で高崎山の銭瓶峠ぜじがぶを越えて通勤。峠を登ると、広大な緑の彼方に白亜の医大病院が鮮やかに浮かんでくる。その度に、私は心の中で感謝と祈りを捧げる。ああ「わが命再生の祈念塔！」消ゆべきこの命ここで再三生きかえさせられているからである。

峠を下りながら、いつもと同じ思いをたどっていく。父も子も黙ったまま。

濃い白一色の果てしない空間、生死不分明の世界を、渴いた心のまま私は独り歩き続ける。突如二人の天使が路傍で迎えるように現れる。ほほえんで。「天使だっ！」たしかに声をあげた。ここは天国の入り口だ。すると天使の声。「お父さん！ 私たちよ！」「なぜ、ここに？」。二人の嫁たちである。「もう、お父さんの心臓が動いているのよっ！」「お父さん、自分で呼吸しているのよっ！」「じゃあ、オレ生きているのか」。早速、手術の先生方、看護婦さんたちへ「ありがとう」と手を合わそうとものがく。それまでは覚えているが、再び意識混濁へ。

放歌高吟、したい放題。「おやじ、心臓はよくなっても頭はもどらないかも」と家族が心配したほど。でも、二人が天使に見えたのは白衣で包まれていたから。

後日、執刀の葉玉先生にわが無礼を謝すと、「あなたは普通です。もっとひどくなる人も…」と温かくとりつくろわれた。

私なりに生死の境を彷徨したような気もする。良寛和尚の詩に「花もまた是れ世上の塵」。思えば、生涯、花とおよそ無縁だったわが命。もう観念の時節だよ。解けて流ればみな同じ。

(一九九二年三月十六日)